

高校生による復興まちづくり

盆子原 歩, 赤澤 邦夫

本稿では、筑波大学システム情報系社会工学科が取り組んできた震災復興を目的とした高大連携プロジェクトについて、その概要および詳細について述べたのち、実際に高校生がどのように復興まちづくり提案を行ったかを紹介する。

キーワード：高大連携，震災復興，ファシリテーション

1. はじめに

本稿では、筑波大学システム情報系社会工学科が取り組んでいる、震災復興を目的とした高大連携プロジェクトを紹介する。

高大連携事業とは一般に、「高校生が大学に行き講義を受けたり、逆に、大学の教員が高校に出かけて講義や講演を行ったりする取り組み」であると認識されている [1]。筑波大学では高大連携活動に積極的に取り組んでおり、その実施数は増加傾向にある。また、「高大連携の部屋」ではデータベースを公開しており [2]、こうした活動の推進に意欲的である。本プロジェクトも、平成 19 年から「高校生世代を原動力とするまちづくりワークショップ活動」として実施してきた高大連携プロジェクトの一環であり、平成 23 年までは土浦市や鉾田市などの茨城県内の高校と活動を実施してきた。

一方、筑波大学では平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災を受けて、被災地の復興・再生に向けた取り組みを重視し、震災直後からさまざまな復興・再生支援プログラム事業を全学的に実施している。なかでも、いわき市と筑波大学は平成 23 年 8 月 10 日に「震災復興に向けた連携及び協力に関する協定」の締結を行い、放射線の影響対策や防災と地域復興支援などを実施してきた。現在、震災復興事業は短期から中期的な視点での支援へと移り、特に俯瞰的な見地からのまちづくり政策への支援の必要性が高まっている。なかでも、将来のまちづくりの担い手である若い世代の意見を地域再生にどのように反映させるかが大きな課題となってきた。

そこで筑波大学では、いわき市の高校生を対象に「自

らの地域のまちづくりに参画してもらうこと」をコンセプトに、「筑波大学連携いわき市高校生によるまちづくり提案—若い世代、震災復興、地域再生—」プロジェクトを立ち上げた。これまでに蓄えてきた高大連携活動のノウハウやいわき市との連携体制を全面的に活用することで、高校生がまちづくりへ参加する公的機会を提供するとともに、筑波大学の教員と大学生・大学院生の指導の下、被災地の若い世代に対する知と夢を醸成させ、震災復興に寄与することを本プロジェクトの目的としている。

2. プロジェクトの概要

本プロジェクトを通して高校生は、大学教員のみならず、年齢の近い大学生・大学院生とともに、高校生の素直な目線から現代的な課題を発掘し、科学的な分析法を用いながら、自由で柔軟な発想によるいわき市の復興まちづくりを提案する。そして被災地において、学問に対する興味・関心の継続的向上を促進させることで、人材育成を通じた震災復興に貢献していくことを本プロジェクトは目指している。

2.1 プロジェクトの構成

本プロジェクトには福島県立磐城桜が丘高等学校から 35 名、福島県立磐城高等学校から 7 名の計 42 名の高校生が参加した。参加した生徒は 1~2 年生で、こうした学外との連携活動経験者は皆無であった。そこで、高校生を 5~6 名ずつ 8 班に分け、作業を円滑に進めるために大学生・大学院生を各班に 1 名ずつ TA (ティーチング・アシスタント) として配置した。TA はグループワークのファシリテーターだけでなく、GIS などの分析手法やプレゼンテーションの指導など、全面的なサポートを行った。なお、著者らはこの TA の立場で本プロジェクトに参加している。また高校生には復興まちづくり提案を行うにあたり、以下に示す a~f のプ

ほんこはら あゆむ, あかざわ くにお
筑波大学大学院システム情報工学研究科
〒305-8573 茨城県つくば市天王台 1-1-1

プロセスを経てもらった。

a. 講義

高校生にとって、まちづくりに触れることは初めての経験である。はじめに、筑波大学教員による都市計画の成り立ちや中心市街地活性化の成功事例などの講義を行った。まちづくりの考え方を学ぶと同時に、普段、高校で学ぶ科目とは異なり「都市計画・まちづくり」という専門分野は、数学も理科も社会も、すべての科目が総合的に作用し合っていることを実感してもらった。そのほか、いわき市の被災状況や復興に向けた取り組みをいわき市職員から紹介していただいた。

b. まちあるき

班ごとに市職員の説明を受けながら、いわき駅周辺のまちあるきを行った。飲み屋の集積する商店街や歴史的な建造物の並ぶ通り、自然豊かな川沿いなど、普段は意識せずに通っていた場所について、改めて見つめ直す機会となった。

c. グループワーク

まちあるきで感じた、いわき市の特徴をブレインストーミングによって話し合った。質よりも量を重視して、多くの意見を促し、出てきた意見を KJ 法を用いながら整理した。KJ 法とは、アイデアや意見を小さなカードに記述し、カードをグルーピングしていくことで図解化する作業のことである [3]。こうして多くの意見を出し合いながらそれらを共有し、意見をまとめていった。

d. 科学的なアプローチによる分析

多くの人に自分たちの考えを納得してもらうためにはどうしたらよいか。まちづくり提案はややもすれば言葉による抽象的な表現となりがちだが、視覚的または数値的に表現されたほうが聞き手の理解は深まりやすい。例えば GIS (地理情報システム) を用いることで、空間的な情報を視覚的に表現することができるほか、コーホート要因法 [4] では具体的な将来人口を予想することができる。このような科学的手法で課題を浮き彫りにすると同時に、自分たちの提案イメージをより正確に伝えるために、画像編集ソフト Adobe Photoshop[®]を用いた修景も行った。

e. ストーリーづくり

グループワークで生まれた発想や提案を、わかりやすく伝えるためにはどうしたらよいか。TA からアドバイスを受けながら高校生が主体となって発表のストーリーを形作る。

f. PowerPoint[®]による発表と講評



図 1 グループワークの風景

大学では一般的な PowerPoint[®]によるプレゼンテーションも、高校生にとっては慣れない作業である。班内で役割を分担しながら検討したストーリーに沿って、一連の PowerPoint[®]スライドを作成し、原則全員で発表を行う。発表会には毎回講評者をお招きし、プレゼンテーションに対する感想やコメントを述べていただく。

2.2 全体スケジュール

前節で述べたプロセスを、平成 25 年は以下のようなスケジュールで行った。

■6月14日 オリエンテーション (場所:磐城桜が丘高校)

高校側で事前に告知し、本プロジェクトに少しでも関心のある生徒に対してオリエンテーションを実施した。前回(平成24年)のプロジェクトの様子を紹介したほか、簡単なグループワークも体験してもらった。

■7月13日 筑波研究学園都市見学 (場所:つくば市内)
いわき市の特徴をより明確に把握するため、比較対象としてつくば市の見学を行った。

■8月8日-8月10日 第1回ワークショップ (場所:いわき市文化センター)

講義を受け、まちあるきを行った後、「まちあるきをして感じた、いわき市の良い点と悪い点を書き出してみてください。」そう言って高校生に2色の付箋とペンを配る。生徒らは戸惑いながらも徐々にペンを走らせていく。意見がある程度出てきたら、今度はそれらをグルーピングしていく。この作業を繰り返すうちに、徐々にいわき市の特徴、魅力と課題が見えてくる。そして、現在のいわき市は、高校生の目にどう映るのかがわかってくる。ここで肝要なことは、意見を言いやすい雰囲気を作り出すことだと感じた。学年もクラス

も違う高校生たちなので、まずは自己紹介などで場を温める工夫があるとよい。また、普段触れ合わない生徒同士の交流が、協調性を養うことにもつながる。

■10月12日 第2回ワークショップ（場所：磐城桜が丘高校）

アンケートやヒアリングなど、第1回のワークショップで足りなかった点や提案の根拠となるデータ分析を行った。今回のワークショップで印象的だったのは、生徒が能動的に行動していたことである。なかにはワークショップ後、各TAとLINEというスマートフォンやPCのアプリケーションソフトを用いて連絡を取り合いながら、高校生たちだけでアンケートの作成および実施を行っている班もあった。

■11月4日 高大連携シンポジウム（場所：筑波大学）

腰塚武志氏（前オペレーションズ・リサーチ学会会長）、中村良平氏（応用地域学会会長）に講評をいただいた。また、ほかの高大連携プロジェクトとの合同シンポジウムでもあり[5]、互いに刺激し合う場ともなった。

■12月22日 いわき市まちづくり復興シンポジウム（場所：いわき産業創造館）

この日のテーマは「高校生らしい元気な発表」であった。つかみで笑いを誘ったり、聴衆への質問形式を取り入れたり、各班それぞれに工夫が凝らされており、会場は大いに盛り上がった。永田恭介氏（筑波大学学長）、横田清泰氏（内閣府地域活性化推進室参事官補佐）らをお招きしたほか、いわき市の一般市民も参加したシンポジウムであった。フロアアンケートからは「若い高校生が柔軟な発想で地域について検討している大変刺激的であった」などのコメントがあった。

3. 高校生の提案

ここからは、実際に高校生たちがまとめた提案を紹介していく。本プロジェクトではいわき市全体を多面的に見つめるため、2班ごとに以下の異なるテーマを設けた。

- 1) 若い世代と地元商店街—コミュニティの再構築、界隈性の復活
- 2) 自然・歴史・文化による活性化プラン—中心地の復権
- 3) 健康・安全・安心のまちづくり—良好な生活空間

の創出

4) 戦略的ブランディング計画—市民の誇りの確立

本節では特に、著者らがTAとして携わった「戦略的ブランディング計画—市民の誇りの確立」というテーマでまちづくり提案を行った二つの班（以下A班、B班とする）の提案を紹介する。A班は『いわきブランド』の発信を目的としたゆるキャラの活用、B班はいわき市の観光の充実を目的としたご当地グルメ開発（料理コンテストの開催）を提案した。

3.1 ゆるキャラの活用（A班）

A班のKJ法の結果を図2に示す。これより、スバリゾート・ハワイアンズ（以下、ハワイアンズと省略）をはじめとして、いわき市の観光資源は豊富に存在することがわかる。しかしながら、ハワイアンズを除くと観光資源の全国的知名度は低く、結果としていわき市のブランド力も低いと考えた。そこで、ゆるキャラを活用して、各観光資源を『いわきブランド』として発信することを提案した。

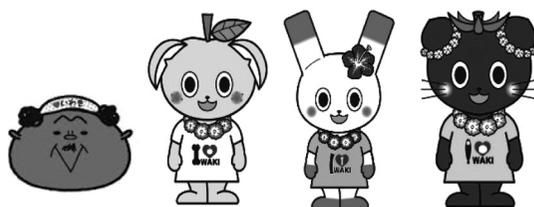
■既存のゆるキャラ認知度

調査の結果、いわき市には現在16体ものゆるキャラが存在していることがわかった。その一部を図3に示すが、梨やネギなどいわき市の名産品をモチーフとしたゆるキャラが多いことが特徴として挙げられる（例：なしポチ、ネギびよん）。

このように多くのゆるキャラが存在するものの、既存のゆるキャラは総じて認知度が低く、市民にさえ浸

名所 名物	ハワイアンズ	芸術	お菓子	鮎きる	有名でない
	ジャンボフード	新しい駅	アリオス	水戸に負けている	
お店	空き店舗	目立たない	いわきらしきがない		
ゆる キャラ	フラおじさん	宣伝が甘い	目立っていない		

図2 KJ法の一部抜粋（A班）



©いわき市

図3 いわき市の代表的なゆるキャラ（左からフラおじさん、なしポチ、ネギびよん、トマにゃん）

問. いわき市のゆるキャラとして知っているものはいくつありますか？ (回答：男性 n=29, 女性 n=27)

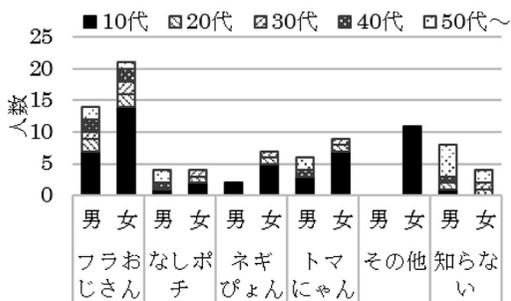


図4 ムゆるキャラ認知度アンケート結果

透していないように考えられる。また、多くのゆるキャラが存在することで露出が分散してしまい、個々に対する認知が低下してしまったのではないだろうか。こうした問題意識から、「ゆるキャラをより市民に浸透させるには、特定のゆるキャラに絞って広報活動をすべきだ」と判断し、ゆるキャラの認知度に関する街頭アンケートを行った。その結果を図4に示す。

アンケート結果からはわかったことは二つある。一つ目は、やはりいわき市のゆるキャラ認知度が低いこと。二つ目として『フラおじさん』のみ、その認知度が過半数に達していることである。そこで『フラおじさん』の個性的なキャラクターに潜在的な魅力を認め、いわき市の広告塔として『フラおじさん』を積極的に活用することとした。

■ヒアリング調査

さらに、一部のゆるキャラを管理しているいわき市農林水産部へ、ゆるキャラの活動方針に関するヒアリングを行った。担当者からは「ゆるキャラの活動方針として、ゆるキャラ自体を売り出すのではなく、特産品をPRするためのサポートとして活動している」という回答が得られた。くまモンなどの他自治体のゆるキャラの活動に比べ、いわき市のゆるキャラの活動は消極的であり、ゆるキャラ自体を前面に押し出した活動の必要性がある。

■具体提案

そこで、知名度の高いハワイアンズ行きのシャトルバス壁面にフラおじさんを描いたり(図5)、他ゆるキャラと対戦する携帯アプリを作ったり(図6)することで、『フラおじさん』を積極的に売り出す提案を行った。著者などは本当にこういうバスが存在するの

かと勘違いするほど、高校生による修景作品のできが非常に高く、その技術習得の早さにはただただ驚かされた。ゆるキャラの露出が増えるほど、いわき市の観光地や名産品など観光資源も同時にメディアに接する機会が増え、認知度も高まるであろう。それらが『いわきブランド』の活性化、ひいてはいわき市全体の活性化へもつながることが期待されるのである。

3.2 ご当地グルメの開発 (B班)

B班でもKJ法の結果(図7)、A班と同じようにいわき市には観光地やイベントなど観光資源が豊富であると考えた。しかし、A班ではジャンボフードなどご当地グルメも魅力的であるという意見であったのに対し、B班ではご当地グルメがないという意見に至った。このように、同じものを見てもグループごとに異なる



図5 バス壁面へのイラスト(高校生による修景)



図6 携帯アプリの例(高校生による修景)



図7 KJ法の一部抜粋(B班)

結論に至るのは大変興味深いことである。

KJ法による魅力・課題の整理の後、いわき市を訪れる観光客は一体どのように観光しているのか、そのフローについて考察した(図8)。ここでKJ法の結果と合わせると、いわき市には遊ぶ場所やお土産は豊富だが、いわき市ならではのご当地グルメが足りないことが浮かび上がってきた。そこでB班では、料理コンテストを開催し、新たにご当地グルメを開発することで、いわき市の観光をより魅力的にすることを提案した。

■ご当地グルメの知名度調査

いわき市の既存のご当地グルメを改めて調査したところ、カジキのガーリックステーキや小名浜たこせんべいなど、一応は存在していることがわかった。しかしながら、これらの認知度に対して大きな疑問があり、磐城桜が丘高校において市内のご当地グルメの認知度に関するアンケート調査を行った。その結果を図9に示す。一見してわかるように、市内のご当地グルメの知名度はととても低くなっている。

■ヒアリング調査

次に、ご当地グルメに関して、いわき市商工観光部観光交流課でヒアリング調査を行った。その結果、東

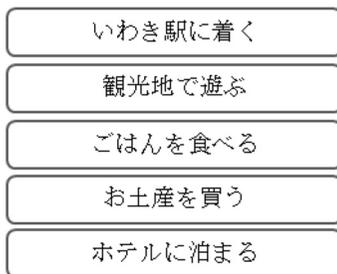


図8 観光客の旅程フロー

問. いわき市内のご当地グルメを知っていますか?
(回答: n=240)

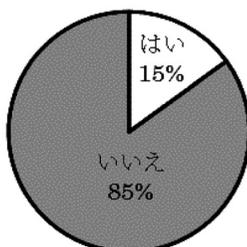


図9 ご当地グルメの認知度アンケート結果

日本大震災の影響でカジキやウニなどが獲れなくなってしまったこと、トマトなどの名産品を使ったご当地グルメはないことが判明した。また、いわき市ではすでに、カジキを食材とした料理コンテストが市場の調理実習室で開催されていることがわかった。しかし、このコンテストは市内の事業者を参加対象としたものであり、現状では一般人の参加はできないとのことであった。以上の調査結果から、いわき市の名産品を用いたご当地グルメの開発及び普及が必要であり、広く料理を募ることのできる一般参加者向けの料理コンテストの開催を提案するに至った。

■提案

そこで年1回、毎年季節を変えながら、旬のいわき産の食材を使用した料理コンテストを行うことを提案した。表1は市内で採れる食材の旬の時期を示している。いわき市では年間を通して、何かしら旬の食材が収穫できることがわかる。

また料理コンテストに関しては、参加者を一般の主婦などから広く募り、評価も一般市民からの投票で決定することで、より開かれた料理コンテストにしようと考えた。開催場所としては、イベント開催時に集客力のある駅前広場(図10)で行うことで、中心市街地の活性化と広報活動もあわせて担うものとした。

新しいご当地グルメによって観光の魅力が増し、観

表1 いわき市名産品の旬

名産品	春	夏	秋	冬
トマト	○	○	○	○
梨		○	○	
しいたけ			○	○
カジキ				○
メヒカリ				○



図10 イベント開催時の駅前広場

光客数が増加するだけでなく、地産地消の促進や中心市街地の活性化など、いわき市の他産業などにも効果が期待できる。ご当地グルメ開発と料理コンテストを開催することは、いわき市全体へ大きな効果があると結論づけた。

4. おわりに

当初、グループワーク未経験の高校生は、互いに話したことがないこともあって、班内で上手くコミュニケーションをとることができなかった。班によってはTAが間に入らなければ議論が進まない状態だった。しかし、プロジェクトが進むにつれて、高校生は徐々にコミュニケーションをとり合うようになり、例えば個々のヒアリングにより得られた結果をグループ全員と共有したり、新たな調査事項について話し合ったりと、TAがリードしなくとも高校生が主体的に作業を進めることができるようになっていった。

また著者らを一番驚かせたことは、高校生が自主的にアンケート調査を行っていたことである。発表会での講評を受けて生徒自らが考え、必要と思われる調査を行っていたのだ。ただ漫然と議論したり、受動的に行動したりするだけでなく、自分たちで能動的に行動してきたことが、本プロジェクトを通して最も成長した点なのではないかと思う。著者らも高校時代にこういう経験をしていれば、あるいはもっと活動的に大学生活を送れたのではないかと思うと、少し羨ましくもあった。

実際に、高校生が本プロジェクトに対して抱いた感想の一部を紹介する。

一まちづくりにおいては広い視野を持つことと、また提案をまとめてうまく伝える大切さを学びました。

一提案するには、さまざまな調査が必要なことがわかり、その大切さと大変さを学びました。

一大きな舞台で3回（ワークショップ内で1回、発表会で2回）も発表して、度胸がつけました。

以上からもわかるように、高校生の段階でグループワークやプレゼンテーションを経験することで、高校の授業では得られないものごとへの客観的な考え方やプレゼンテーション能力を身につけることができる。また、磐城桜が丘高校の担当教員が「参加した生徒の多くは、普段は控えめで物静かな性格で、あまり人前で話すのを得意とするタイプではない。しかし、グループワー

クを通してリーダーシップを発揮する生徒や、聴衆を魅了するプレゼンテーションを行う生徒など、生徒たちの新たな一面や成長していく姿が見られた。」と語ってくださったように、そうした変化が行動にまで現れる生徒も多かったです。

一方、TAを担当した大学生・大学院生にとっても学習の場となった。ファシリテーターがきちんと意見を聞いてくれる、高校生にそう感じさせることが良い議論へとつながっていく。序盤はどうしても議論が遅々として進みにくい中で、どうやったら皆が素直に意見を述べられる雰囲気を作り出せるか。どの班のTAも必死になって考え実践したため、徐々にプロジェクト全体の雰囲気も和やかになっていった。普段の演習・実習ではグループワークに参加する側の立場であるが、今回はTAという立場に身を置くことでグループワークの進行法やその困難などを改めて学ぶことができたように感じられる。また、被災地としてだけでなく、実際に生活する場としてのいわき市に対して興味を抱いた学生も多かった。ワークショップ期間中はたまたま七夕祭りとなっていたため、ワークショップ後にはTA皆で大賑わいの商店街を見て回り、蔵を改修したバーで飲みながら、実際にいわき市で生活することを想像してみたりもした。

高校生たちの参加した動機はさまざまだろうが、今後高校生に期待することを二つ挙げたい。一つは、本プロジェクトをきっかけにして、地元に関心を持ってほしいということ。もう一つは、今回実践した「疑問に思ったことは素直に調べる」「データがなければ自分の足で稼ぐ」といった単純なことではある重要な姿勢を、忘れないでほしいということである。

なお、本プロジェクトの活動内容は、筑波大学広報誌「Tsukuba communications vol.21」において、地域貢献活動としても取り上げられていることを付記しておく。

参考文献

- [1] 勝野頼彦、『高大連携とは何か』、学事出版、2004。
- [2] 筑波大学、「高大連携の部屋」、<http://koudai.tsukuba.ac.jp/>（2014年3月3日確認）。
- [3] 川喜田二郎、『KJ法—混沌をして語らしめる』、中央公論社、1986。
- [4] 栗田治、『都市モデル読本』、共立出版、2004。
- [5] 吉瀬章子、高校生が挑む「●●を上手く決めて■●を小さく」、オペレーションズ・リサーチ、57, 39-45, 2012。